

ふ 振り返るには十年が必要

まちづくりは厄介なものだと思うことがある。建築などものをつくると「竣功」という節目が明確だ。最近、建築はできてからその社会の中でどのような役割をはたしていくのかが重要で、社会とともに育っていくもので完成はない、とも言われるが、それでも明確なカタチになる時がある。それに對してまちづくりはその節目が明確ではない。

まちづくりの方向性を示す「計画」をつくるという仕事だと、計画書をクライアントに納品するという時があり節目といえれば節目かもしれない。しかし、まちにとつてみればそのことにたいした意味はない。問題はそれからまちがどうなっていくのかということだ。具体的な整備事業にかかると合意形成や整備計画づくりにかかると、少しは成果が目に見えるカタチになるが、それこそ、その事業がまちにとつてどういう効果をもたらすのかを見極めるにはそれなりの時間が必要になる。

描いた将来像が具体的にカタチになるのか、絵に書いただけで終わることになるのか、実現のスピードは読めない。その動きがカタチになるまで持続するのも不確定だ。そして仮にカタチになるまで行き着いたとして、それが本当にそのまちのために機能するのを見極めてはじめて、まちづくりプランナーとしてそのまちに関わった成果をあげることができたのかどうかとわかると言える。

その間の時間はおそらく十年は要するのではないか。そんな先まで仕事で関わり続けることは稀だし、そこまでの責任を負うことは誰にも求められないのかもしれない。それでも私は、そのまちに関わったからには気になるのだ。

ただ、十年はあまりに長い。関わっていた当時はキーパーソンにも恵まれ上手く動いていても、何かをきっかけに止まってしまうこともある。その間に社会情勢が変わって修正が求められることもあるだろう。そうやってくると自分がどんな役割を果たせたのかわからなくなっていくこともある。そうだったとしても「振り返るには十年が必要」という言葉は、まちづくりプランナーとしてのやりがいと考えると重い。